保育園児による食事量の判断とその行動化の過程

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): nursery school lunch, buffet-style method, ethnography, guided participation, meal size 作成者: 小野, 友紀 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6999

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

学位論文の内容の要旨

報告番号　：　甲（又は乙）　第　　号

学位申請者	小野　友紀
論文題目	保育園児による食事量の判断とその行動化の過程
審査委員	主査　柴山　真琴
	副査　金田　卓也
	副査　青江　誠一郎
	砂上　史子　　（千葉大学）

幼児の食事行動には、生命の保持・健康増進のための栄養摂取と文化適合的な食事行動の形成という2つの側面が含まれる。特に保育園の食事活動を対象にした研究は、複数の学問分野(発達心理学・保育学・栄養学など)で行われてきたが、保育園児の食事行動の形成に直接的・間接的に関わる保育者や他児との相互作用過程を解明する研究と食事摂取量の評価に基づく栄養調査研究が並行して行われており、相互作用の特徴が園児の食事量とどのように関係するかは未解明であった。また、園児の選択の余地が大きい「バイキング方式」の食事活動での園児の食事行動の実際もわかっていない。本研究では、保育園児が「バイキング方式」の食事活動に保育者・他児と共に参加する中で、自分の食事量を判断し盛り付けて食べるようになる過程を明らかにすることを目的とした。

序章では、先行研究のレビューを行い、研究目的を設定した。また1)研究方法論として「解釈的アプローチ」を認識論とし、エスノグラフィー(参与観察とインタビュー)と食事調査をデータ収集法とすること、2)データの分析枠組みとして、学習過程を「コミュニティ」「相互作用」「個人」の3つのレベルから包括的に捉えるRogoff(1995)の「社会文化的アプローチ」を借用することを述べた。主要なデータは、行動観察データ(30回)と食事調査データ(保育園と家庭での食事量測定)から成る。

第1章では、食事活動の構造を保育の信念体系・文化的技術と対応づけて検討した(コミュニティレベルの分析)。その結果、「自主的個別保育」「たて割り混合保育」「園児一人ひとりの興味の重視」「ゆるやかな担当制による保育」という保育の信念体系は、食事活動では「バイキング方式の食事提供の仕組み」「食事活動における有能な他者を生み出す仕組み」「自分の食事量を自分で判断する仕組み」「保育者が園児の食事量を把握しやすい仕組み」として確認された。また、「日課や食事活動の手順」「着席の位置」「食器、食具、その他の道具」「食事提供の方法と食事内容」という保育の文化的技術は、食事活動では「食事活動における盛り付けの仕組み」「他者への参照や関わりを誘発する仕組み」「使用

する道具がもつ意味を共有する仕組み」「食事量の判断を支える仕組み」として確認された。

第2章から第4章では、食事活動で生起する相互作用に着目して、対象児の食事活動への参加過程と食事量の判断過程を検討した(相互作用レベルの分析)。第2章では、1・2歳児クラス(対象児:2歳2か月17日～3歳2か月2日)で観察された対象児－保育者/園児間の相互作用を質的変化に着目して分析した結果、①全ての盛り付けを保育者が行う「試し期」、②自分で盛り付けた後に保育者を参照して分量の適否を確認する「ゆらぎ期」、③保育者を参照せずに自分で全て盛り付ける「確定期」、の3つの時期を見出した。第3章では、3歳以上児クラス(対象児:3歳2か月9日～4歳6か月12日)で観察された対象児－他児－保育者の相互作用を質的変化に着目して分析した結果、④保育者や他児を参照しつつも、従来と同様の食事量を盛り付ける「慣れ期」、⑤年長児を参照しつつ、おかわりの積極的利用により食事量を調整する「修正期」、⑥箸の使用が許可され、おかわりの分量が最初の盛り付け量を超えなくなる「適応期」、⑦自分の好みや食事終了時間を意識しながら食事量を決める「定着期」、の4つの時期を見出した。第4章では、第2章・第3章の相互作用過程の媒介物である文化的道具(食器・食具・その他の道具)を取り上げて、使用される時期・使用のされ方・象徴性に着目して分析した。その結果、1・2歳児と3歳以上児の両クラスで使用されている同型の食器は、「料理名の表示物」「保育者との意思疎通の手段」「盛り付け量を測る計器」「お姉さんぽく見えるための小道具」など複数の機能を担っていることが明らかになった。また、「大人」を象徴する箸の使用は、園児にとって自分の成長を認識する手段になっていると考えられた。

第5章では、対象児の変化過程を食事量判断の「スキルの専有」という視点から検討した(個人レベルの分析)。対象児は、バイキング方式をとる保育園では「食べきれる量を盛り付けおかわりで足す」という方法で、親による多量提供方式をとる家庭では「食べられない量を残す」という方法で、食事量を調整していた。また、対象児が判断した保育園と家庭の食事量を栄養学的に評価した結果、不足傾向のある栄養素(カルシウム・鉄・ビタミンA)があるものの、摂取エネルギーの面では概ね良好な食事量の判断ができていると考えられた。

終章では、本研究の結果を総合的に考察した。本研究の主要な成果は、次の3点に纏められる。第1点は、＜保育園の食事活動の構造－保育者や他児との相互作用過程－園児の食事量判断スキルの習得過程＞の相互連関を多層的なデータに基づいて具体的に解明したことである。第2点は、この習得過程は、＜①試し期－②ゆらぎ期－③確定期－④慣れ期－⑤修正期－⑥適応期－⑦定着期＞という7つの時期から成ることを発見したことである。第3点は、これらの時期の移行過程では、盛り付けと食事量判断の主体の移行、食べきる責任の移行、段階的な調整による食事量の確定、食事終了を確認するための参照軸の変更、という複数の変化が生じていることを見出したことである。園児の食事量判断を促進する複数の仕組みが埋め込まれた食事活動に、保育者の個別対応的な支援を受けつつ他児を観察しながら参加できる状況下では、園児が自分の食事量を判断し得ることが示された。最後に本研究の研究上の意義と実践上の示唆を提示し、本研究の限界と課題を述べた。